

■中山間地自然農業体験プログラムも佳境に



南木指に広がる棚田景観



稲刈り後掛け干し作業をおこなう参加者

第 3 回目は、10 月 16 日に学生と教員あわせて 20 名が参加し、稲刈り体験と金浜川の上流観察(首頭工と水利)をおこないました。当日は朝 8 時半に環境科学部前を出発、1 時間半かけて雲仙市小浜町南木指(小田山地区)に到着。

昨年度まで 2 年間実施してきた、「地域力再生プロジェクト」では、イノシシの被害がほとんど心配のない、橘湾近くの緩傾斜の棚田を利用してきました。今年度は、地元の方々と協議し、中山間地の直面している課題や魅力を学生たちにより知って欲しいという意向もあり、金浜川の上流沿いに広がる小田山地区内の棚田へと場所を移動しての開催となっています。

稲刈りと掛け干し作業は、半数以上の学生が初めてのことで、地元の受け入れ団体「山彦の会」の方々に適宜アドバイスをいただきながら 2 時間ほどで無事にすべての作業工程を終了。午後からは、棚田に供給される水の起源をたどるべく金浜川沿いの上り坂を歩いてみました。農業にとって命綱となる水を、地元の方々がどんなに大切にしてきたかをうかがい知ることができました。

最後に、木指小学校小田山分校後(小田山公民館)で地形図をみながら水系と棚田の広がりや耕作放棄地の拡大や高齢化による労働力の流出、棚田を地域資源と位置づけた多面的利用のあり方について意見交換をおこないました。

このような機会をとおして、学生たちにとってフィールドで考えることの大切さを感じてもらえたらと考えています。



小田山公民館での意見交換のようす

■中山間地自然農業体験プログラムも佳境に …… 1	■連載 インタビュー 環境科学部プロフェッショナル⑤ …… 3
■「ながさき地域発見大学」開催 …… 2	■書架 『自然エネルギーの可能性と限界』 …… 4
■連載 長崎まちエコ探検⑩ 西毎橋 …… 2	『世界のジオパーク』 …… 4

■「ながさき地域発見大学」開催

11月17日(木)～21日(月)、50歳以上をおもな対象としたシニア短期留学の旅行企画「ながさき地域発見大学」が、環境科学部、大学附属図書館、長崎歴史文化博物館を会場として開催されました。

この企画は、2007年度から2009年度まで「ながさき歴史発見大学」として活水女子大学を主会場に催されてきましたが、昨年度から装いを新たに、本センターが企画全般のコーディネートを務めることになったものです。

北海道や埼玉、大阪など全国各地から9名を迎え、座学や附属図書館古写真資料室の見学など、全10コマの“授業”をおこないました。環境科学部学生が参加しての歓迎レセプションで交流を深めるなど、長崎“游学”にふさわしい学びの機会となったようです。

【座学】

- ・11月17日 古写真にみる長崎の海外交流史(姫野順一 教授)
- ・11月18日 長崎県の島々 日本の歴史は長崎の海で動いた(本馬貞夫 長崎県参与)
- ・11月18日 ふるさと対馬を撮る！ 写真で見る対馬(仁位孝雄 対馬日韓交流写真協会顧問)
- ・11月18日 古事記から壱岐を読む(勝俣隆 教育学部教授)
- ・11月18日 島旅の作法—小値賀アイランドツーリズム協会の取り組み—(深見聡 准教授)
- ・11月20日 対馬の朝鮮通信使と琉球使節(深瀬公一郎 長崎歴史文化博物館主任研究員)
- ・11月20日 五島の歴史(細井浩志 活水女子大学教授)
- ・11月21日 循環型社会と島の漂着ゴミ(中村修 准教授・西浦あさみ 本学部学生)

【フィールドワーク】

- ・11月20日 長崎歴史文化博物館「孫文と梅屋庄吉展」見学・解説(資料館学芸員)
- ・11月21日 長崎大学附属図書館古写真資料室見学・解説(姫野順一先生)



姫野教授の講義のようす



募集パンフレット

■連載

長崎まちエコ探検⑩ 西海橋

街なかを歩いていると、何気ない景観に意外な歴史や人びとの思いが詰まっているのを知ることがある。本コーナーでは、そのような長崎の隠れた自然・歴史・文化などのさまざまなスポットをご紹介します。



2006年に開通した新西海橋の遊歩道から、西海橋を眺めてみました。生憎の曇り空でしたが、手前には迫力のある渦潮を楽しむことができました。西海橋は、1955年に長崎県佐世保市の針尾島と西海市の間にある針尾(伊ノ浦)瀬戸にかかる橋として造成されました。この針尾瀬戸は、大村湾と外海を繋ぐ2か所しかない水路のうちの1つで、海水交換の大部分が行われています。そのため、潮の流れが速く、海底が複雑な地形なので渦潮が発生しています。また、西海橋付近は、長崎県の桜の名所としても知られています。西海橋で、自然の力を肌で感じてみてはいかがでしょうか。(取材=4年 伊藤かおり)

学生が聞き手のインタビュー企画

環境科学部
プロフェッショナル

第5回 中村 修 先生

—環境問題に関心をもったきっかけは何でしたか？

中村先生 高校生の時に観た、水俣の自主上映の映画です。

—学生時代に熱中していたことは何ですか？

中村先生 阪大の工学部環境工学科に所属していた学科の1期生が、「講座に配属されて狭い世界しか見えなくなると環境問題には取り組めない」と頑張ってくれて、研究室に所属しないで卒論を書ける制度をつくってくれてました。なので、指導教員なしで卒論を書きました。



ただし、その代わり全教員を相手に卒論報告をしなければならないので、まじめに取り組みました(笑)。卒論は市民の側からみた関西空港のアセスメントです。2年かけて(留年して)けっこう分厚い報告書をまとめました。現場をいろいろと見て回ることで、本や教室では見えないもの、文字にはできないけど大切なことなど、たくさん得られたと思っています。結果的に関西空港は、卒論で予測したとおり、客も少なく大赤字のままです。

—いつから研究者になりたいと思うようになりましたか？

中村先生 大学院はいろいろ経て、九大の農業経済でした。そこで、農家といっしょに研究会をつくって活動した結果、佐賀県全体の稲作の農薬費が3割も減りました。無農薬有機農業という正しいだけの「形式知」ではなく、農家とともに減農薬という「実践知」によって現場を切り開いていったことは、研究という知的作業による社会変革の体験でもあり、これにはまって研究者を希望するようになったというわけです。

—これからの夢、目標は何ですか？

中村先生 福岡県の大木町などの現場に10年以上関わってきました。生ごみやし尿の循環利用が目に見える形になりましたので、これを九州で広げるための研究会を、自治体や企業といっしょに展開する予定です。10年後には、九州のごみ焼却場が半分になり、そのお金で循環の地域作りが展開されていることを目標にしています。

—今の研究内容について教えてください。

中村先生 「生ごみやし尿の循環利用と地域づくり」「自治体や学校のEMSの普及(長崎県庁といっしょにやっています)」「循環の経済社会のための理論研究」の3つを柱に研究しています。また、これから2年に1冊本を書きたいと思っています。

—学生にひとことお願いします。

中村先生 高校までは目先の受験に縛られていましたが、大学では「無駄」な時間がたくさんあります。経済効率に縛られない「無駄」な時間を楽しんでください。

—ありがとうございました。

□ボランティアを募集しています□

環境教育研究マネジメントセンターは、学生や地域の方など読者のみなさんの力を必要としています。このニューズレターの企画・作成の補助や発送作業、学生みずからが企画しておこなう課外のフィールド活動などに興味のある方、まずはお気軽に深見(fukami@nagasaki-u.ac.jp)までご連絡ください。

■書架

『自然エネルギーの可能性と限界』

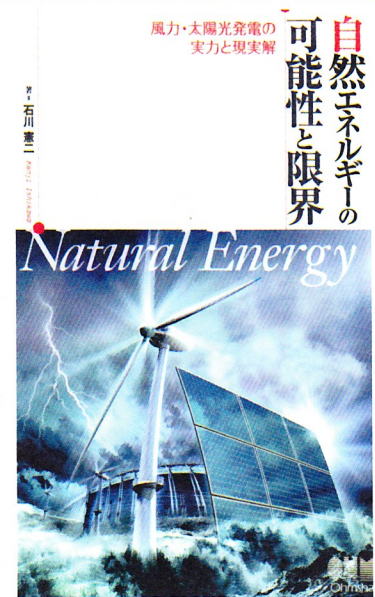
—風力・太陽光発電実力と現実—

(石川 憲二著、オーム社刊、2010年、¥1,600+税)

知っているようで意外と知らない自然エネルギーの実態。永続的に利用できる資源として関心が寄せられているが、はたして化石燃料の代わりになるのか？その疑問に挑んだのが本書である。自然エネに詳しくない人にもわかるよう丁寧に解説されており、最新のデータをもとに自然エネの可能性について述べられているので研究のお供としても大いに役立つだろう。

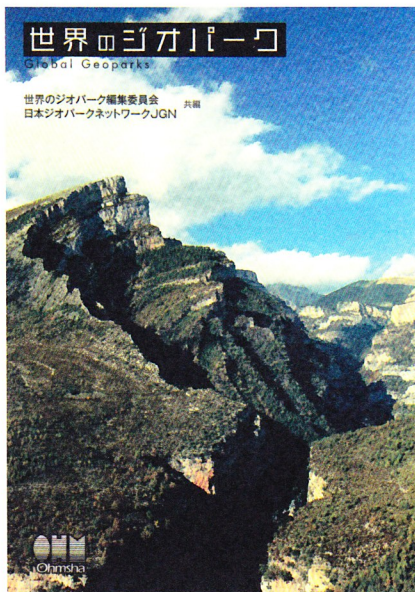
著者の自然エネに対する厳しい指摘が、冷静にエネルギー問題を見定める手助けとなっている。ひと癖ある説明文にも思わずにやりとさせられる、経済と環境2つの分野を絡ませた一冊。

(4年 香川菜美)



『世界のジオパーク』

(世界のジオパーク編集委員会・日本ジオパークネットワーク
共編、オーム社刊、2010年、¥2,800+税)



2012年5月、島原市を主会場として「第5回ジオパーク国際ユネスコ会議」が開かれる。この会議は、ユネスコの支援により運営されている GGN(世界ジオパークネットワーク)が隔年で開催しており、日本では初となる。

今年までに、国内に世界ジオパークに認定されたのは、島原半島・洞爺湖有珠山・糸魚川・山陰海岸・室戸の5地域ある。景勝地や観光地としては聞いたことがあっても、ジオパークとは何かと尋ねられると、意外に答えにくいかもしれない。

本書は、そのような疑問を、全ページカラーで豊富に写真を用いることでまずは視覚的に解消してくれる。何より発刊当時のすべての世界ジオパーク(19か国 63か所)を網羅する初の和書であり、ジオパークの持つ地形や地質の織りなす自然景観の

迫力を追体験(紙上旅行)の感覚で楽しめるのは嬉しい。

何と云っても、ジオパークは「地学の面白さ」を体感できる格好の仕組みである。この原点に、本書は地学への扉を分かりやすく開いてくれる貴重な一冊である。

(深見聡)

□ ■ 編集後記 □ ■

第13号をお届けします。／環境教育研究マネジメントセンターでは、地域連携の取り組みとして、雲仙市・長崎県環境部との協定にもとづくものをはじめ、長崎県内外で環境政策や環境保全・設計に関する協働の相談窓口の役割も持っています。興味を持たれた方は、遠慮なくご相談ください。／早いもので今年もあと1か月ほどとなりました。今年もご愛読いただき、ありがとうございました。／ニュースレター第14号は、3月25日付で発行予定です。(深見)

環境教育研究マネジメントセンター News Letter (第13号)

2011年11月25日発行

長崎大学環境科学部環境教育研究マネジメントセンター
〒852-8521 長崎市文教町1-14

URL <http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/>

Tel&Fax 095-819-2720(深見聡研究室気付)

E-mail fukami@nagasaki-u.ac.jp

(編集長：深見 聡)

印刷：(株)昭和堂